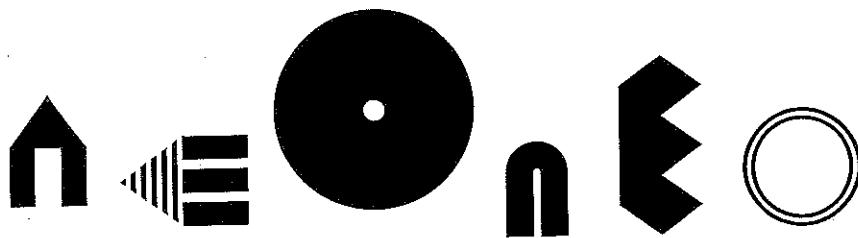


DOCUMENTARY CULTURE MAGAZINE

[ネオネオ]
<http://webneo.org/>

ドキュメンタリーカルチャーの越境空間



特集 原発とドキュメンタリー

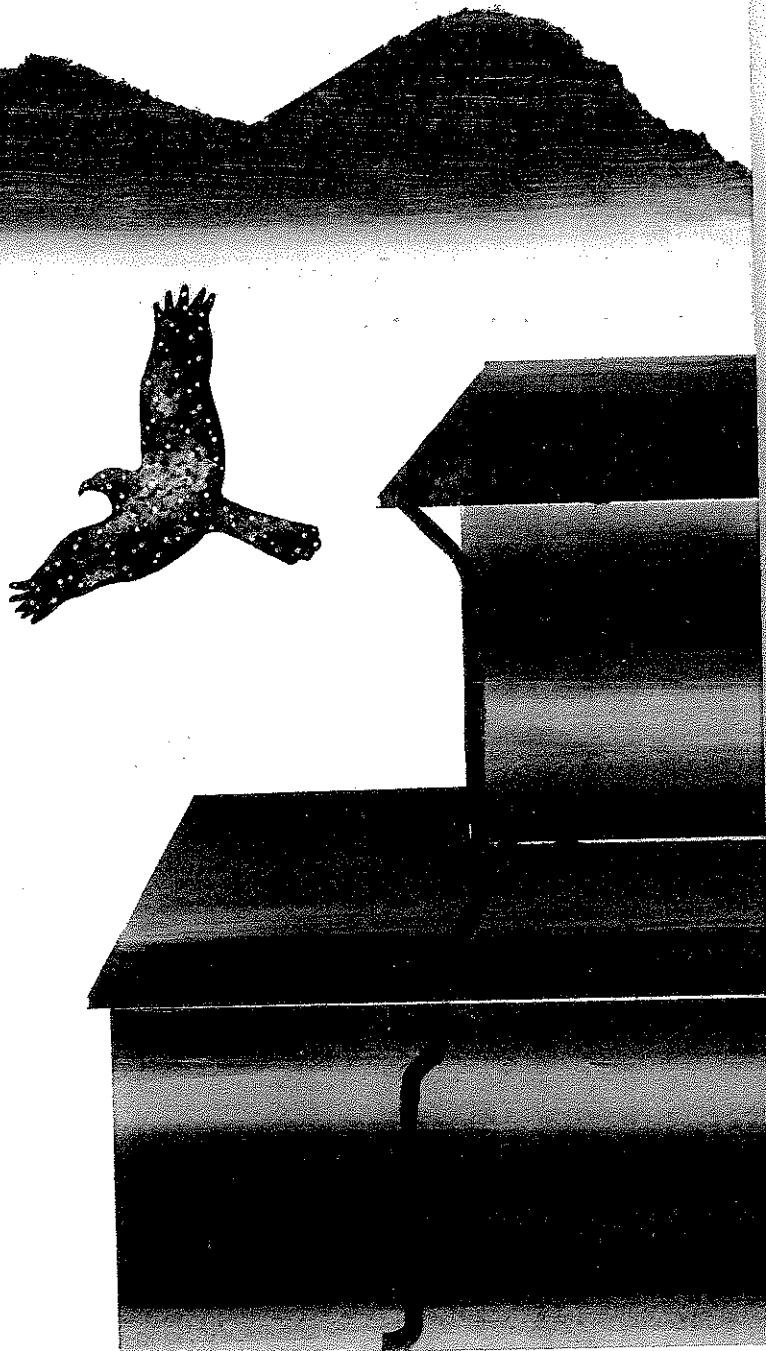
巻頭グラビア＆インタビュー／武田慎平

映画監督座談会／船橋淳×藤原敏史×松林要樹×瀬々敬久
インタビュー／高山明 語り下ろし／開沼博

#02

2013 SPRING
1000YEN

小特集 21年目の不在 小川紳介トライアングル



存在し得ない義人たちの連帶——山形での小川紳介（文／阿部マーク・ノーネス）

義人は分裂に分裂を重ねて、千方百言を費やしてさらにしゃべったことが仇になつて決して統一を生み出さない。それが義人の法則だね。その点悪人は早いんだ。悪人は連合し、義人は分裂するという社会科学的法則だね。それでも義人は言葉によって連帶できると思っている…

鶴見俊輔

安田武著「忠臣蔵と四谷怪談：日本人のヨミコニケーション」

一九七〇年代始め、日本のドキュメンタリーは絶頂の時にあった。東京国立近代美術館フィルムセンターは一九七三年と一九七四年に大規模な戦前・戦後のドキュメンタリーの回顧上映を行い、一九七三年小川プロは『三里塚・辺田部落』を、同年土本典昭は『水俣一揆——一生を問う人々——』を公開したこところだった。一九七五年の『不知火海』は土本の最も優れた映画であつたかもしれない。この時代には驚くべき数の素晴らしいドキュメンタリーがつくられた。だが、中心となつた人々はのちに劇映画へ転向するか、まったく映画づくりをやめてしまつことになつた。

一九七〇年代始めは鈴木志郎康原一男といった芸術家が注目を集め始めた時期でもあった。こうした出来事は皆、小川紳介が三里塚を後にし、山形へと向かう宿命的な決断をする直前に起きていた。

『三里塚・辺田部落』の制作中に小川プロは交渉し始めていた。一九七二年に東北支部が解散し、北海道と関西支部が矢継ぎ早にそれに続いた。九州支部は一九七五年まで続いたが、その頭にはすでに小川プロは三里塚を後にし、とりわけ成功した『辺田部落』の上映行程で会った農民詩人の木村迪夫の誘いに応じるかたちで牧野へと向かっていた。木村は小川に、『辺田部落』は三里塚での経験の要約のように感じた。

どうにも行くところがないなら牧野へ来たらどうかと冗談半分で伝えた。小川がすでにスタッフに、新天地を探し、九州の食糧協同組合や他の大阪、北海道などへ移ることを検討させていることなど木村はほとんど知らなかつたのだ。木村迪夫は大いに驚いたが、一九七五年に小川プロは木村の申し出を受け入れて、米と映画をつくるため、山形へと向かつた。

すでに根を下ろし、政治的なホットスポットでもあつた三里塚から離れて、静寂な村、牧野へ移住するという小川紳介の決

断は多くの人々を長年にわたり混乱させてきた。多くは当時、小川プロは「転向（戦

前の社会主義者の政治的背信行為）のよ

うに運動に背を向けたと考え、今も考えて

いることだろう。日和見であると弾劾す

る者もいた※。小川プロ内部でも最終的

な決断を下す前に活発な議論が行われた。

そして移住することが決定された時点でか

なりのスタッフが去つていった。

振り返つてみて、小川紳介は、一九七〇

年

代の政治の季節が終わろうとしている

ことに気づき、いち早く前へ進もうとしていたと考える人がいる。他の人は、小川と

いたと政治との関係は他の者とは異なり、小川

は始めから政治よりも映画に興味があつたので三里塚での闘争を離れることはそう

いたと考

る人がいる。他の人は、小川と

いたと考